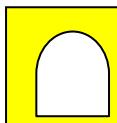


日吉台地下壕保存の会会報

第105号
日吉台地下壕保存の会

2012年度総会のお知らせ

昨年度は3月11日の未曾有の被害をもたらした東日本大震災と、震災後に次から次に明らかになった問題に翻弄された一年でした。そんな中で本会が中心となり、第15回戦争遺跡保存全国シンポジウムを開催し、近郊から全国の方まで多くの参加者を得ることができ、実り豊かな交流を持つことができました。また講演会や戦跡めぐりそしてガイド養成講座など、多くの活動をおこなうことができました。

さらに2011年10月には、横浜市は慶應義塾の申請を受けて、慶應義塾大学日吉キャンパスの寄宿舎(日吉寮)の南寮と浴場棟を、「横浜市歴史的建造物」に認定するという快挙もありました。南寮は寄宿舎として使用するために、建設時の外観復元と内部の改修工事が最終段階を迎えており、保存と活用の新しい展開と言えると思います。

2012年度の総会を下記の要領で開き、2011年度を振りかえり、2012年度の活動について討議をいたします。

今年度の総会記念講演は、講師に戦跡考古学の第一人者である菊池実氏をお迎えし、改めて戦争遺跡とは何か、どのような保存活用が必要かという根幹について講演していただきます。私たちの日常の活動の中で、ともすれば素通りしてしまう「戦争遺跡とはなにか」という原点の問題について、ともに考えましょう。皆様のご来場をお待ちしております。

記

○日 時：2012年6月2日(土) 13:00～

○会 場：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎大会議室

○記念講演：13:00～15:00

演 題：「戦争遺跡考古学の現状と課題－戦争遺跡の調査研究そして保存活用－」

講 師：菊池 実 氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員、戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員、本会会員)

○総 会：15:15～15:45

- ・2011年度活動報告
- ・2012年度活動方針案
- ・2011年度会計報告
- ・2012年度予算案

その他

お知らせ

第16回戦争遺跡保存全国
シンポジウム 三重県鈴鹿大会
日程：2012年8月18日(土)
～20日(月)
会場：鈴鹿市文化会館
(※要項など詳細は次号に掲載)

目 次	
お知らせ 2012年度総会	1p
お知らせ 全国ネットシンポジウム	1p
資料 横浜の三つの外人墓地をめぐって(手塚尚)	2～8p
報告 第7回日吉をガイドする講座盛況	9p
資料 ガイドする講座 大倉山と海軍気象部(林宏美)	9p
資料 海軍気象部分室の大倉山移転とその活動について	10～14p
投稿 日吉の思い出(空襲・家族・優しかった兄等々)(小口幸子)	14p～15p
投稿 戦争遺跡か、軍事遺跡か—私の危惧—(山田譲)	15p
お知らせ 2011 平和のための戦争展 in よこはま	15p

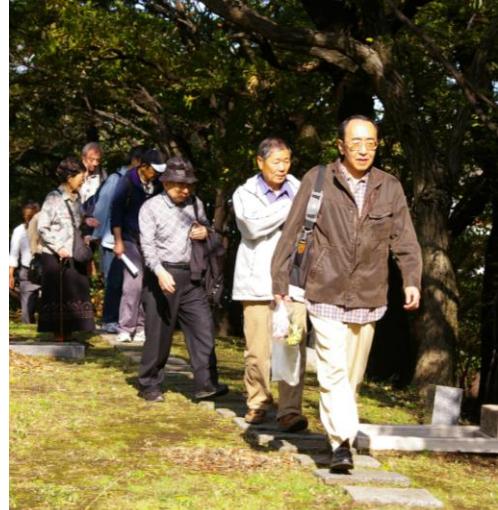
資料

横浜の三つの外人墓地をめぐって

手塚 尚

編集部より：昨年、秋のフィールドワークでご案内をしてくださった手塚さんから、資料をいただきました。以下の文章は、当日の資料に加筆・修正したものです。なお、神奈川歴教協の会誌にも寄稿されています。

横浜には、外人墓地といわれる墓所が四つある。一番有名なのが、観光名所にもなっている山手の外人墓地だが、他の三ヶ所についてはその由来などに、はっきりしない点もある。私は、昨年春以来何回か、これらの墓所を案内する機会があり、その都度資料や伝承を整理してみた。以下、それらをまとめ、この紙面を借りて紹介してみたい。疑問点も多いので、気がついた点は指摘していただきたい。前半は「日吉台地下壕保存の会主催のフィールドワーク」(2011年11月20日実施)の際の配布資料が、後半の英連邦戦死者墓地に関する部分は、POW研究会会報7号(2011年12月25日発行)に掲載したものが元になっている。



先頭が手塚尚さん(根岸外人墓地にて)

I. 根岸外人墓地

1. 墓地の形成

JR根岸線の山手駅前、仲尾台中学校の台地から一段低い所に根岸外人墓地はある。墓地ができるのは1880年。この頃、横浜ではコレラや天然痘などの疫病がはやっていたため、病死者用の墓地として造られたのである。しかし、埋葬が一般化するのは関東大震災の後である。1927年には、「大震災外国人慰靈碑」が造られ、今日まで、市による慰靈祭が毎年行われている。使用が遅れたのは、墓地の管理をめぐる方式の違いの調整に手間取ったから、と言われている。有名な「山手外人墓地」の場合、外国人が作る公益法人が、我が国の法律にしたがって管理しているが、根岸の墓地は「市の衛生局」に管理権があり、この管理の権限の違いや管理方法をめぐり論議があつたらしい。その後、震災で、「山手外人墓地」の埋葬地が手狭になったため、根岸の墓地への埋葬がすすんだ、とされている。ここに眠っている著名人に、アウセイ・ストロークがいる(C区)。彼は、戦前欧米の著名音楽家の来日を企画した名マネージャーで、ハイフェッツ、シャリアピンなどを招へいし、日本への西欧音楽紹介に尽力した。墓石には朝日新聞の手で、それを顕彰する碑文が刻銘されている。

2. ドイツ水兵の墓

1942年11月30日、横浜新港埠頭に停泊中のドイツ輸送船ウッケルマルク号が爆発事故を起こし、近くに停泊していた仮装巡洋艦トル号、ドイツ汽船ロイテン号、日本海軍の徵用船第三雲海丸にも延焼・爆発し102名(内中国人36名・日本人5名)の死者が出る大惨事となった。当時は報道管制があり、詳細の発表はほとんどなかった。ドイツ人死者は、将校クラスが「山手外人墓地(12地区)」に、一般の兵士は「根岸外人墓地(D区)」に埋葬された、とされる。だが、前者は祈念碑だとする説もある。生き残ったドイツ兵は、箱根芦ノ湯の「松坂屋旅館」(現在は廃業)に収容され、敗戦後に帰国する際には何人かの遺骨を持ち帰ったという。また、中国人(捕虜という話もある)死者は、火葬された後、中華義荘内の安骨堂に納められ、遺骨は戦後大陸に帰ったという。一方、ドイツの仮装巡洋艦に拿捕された連合国人138名は、福島市花園町のノートルダム修道院(1935完成・現桜の聖母短大構内)に収容された。この建物は最近まで現存し、廊下のガラスには収容された子どもが鉛筆で書いたいたずら書きも残されていた。だが、今回の東日本大震災で被害を受け、建築史学会を中心に保存運動が起つたが、古式の建築資材などの調達が困難なうえ、費用も数億円かかることから、解体が決まり2011年の11月中旬、惜しまれながらも解体された。

3. 混血私生児 900体の埋葬

根岸外人墓地を「有名」にしたのは、墓地の一番高い区画に「敗戦直後の占領下で日本女性と米国人との間に生まれ、すぐ死亡した約900体の乳幼児の遺体が眠っている。」という話である。そして、1999年5月には、子どもたちへの慰靈碑(D区)も建てられている。しかし、当時の熱狂的な雰囲気が収まった今、あらためて関係文献を読んでみると、この話の根拠が不明確なことがわかる(田村氏も乳幼児の埋葬についての資料は示していない)。地元には、900人という数は多すぎるという見解はあるが、そうした乳幼児が埋葬されている、という話は伝えられていたようだ。戦後、子どもの遺骨を掘りだして持ち帰った父親もいる。

一方、日本で死んだ米兵や、朝鮮戦争での戦死者を一時ここに埋葬していた事実と混同しているのではないか、という人もいる。実際米軍は、1947年5月に山手外人墓地で米軍死者の慰靈祭を行っているし、48年10月には横浜港から1211柱が帰国している。こうしたことと混同しているのではないか、というのである。また、戦後の一時期墓地管理がしっかりなされなかつたらしいが、墓地は接收の対象にはなっていないようだ(市史通信12号、2011)。接收時代に資料が持ち去られ不明となったという話もあるが、すでにそうした文書は米国で情報公開の対象となっているはずである。いずれにせよ、今一度資料の見直しが必要であろう。

参考文献

- 田村泰治『郷土横浜を拓く』1997
 山崎洋子『天使はブルースを歌う』毎日新聞社、1999
 石川美邦『横浜港ドイツ軍艦燃ゆ』木馬書館、1995
 小宮まゆみ『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』吉川弘文館、2009
 松信太助編『横浜近代史総合年表』有隣堂、1989

II. 地蔵王廟

1. 地蔵王廟とは

地蔵王廟とは、中国人墓地全体を示す「中華義荘(通称南京墓)」に造られた地蔵を祭る建物のことだが、中国人墓地を示す言葉としても用いられている。中華義荘(中国人墓地)が現在の地、中区大芝台7に造られたのは1873年。神奈川県が土地を購入し中華会館に貸与する形であった。それまでは、「山手外人墓地」の一番低い所、ウチキパン屋から元町プール(水屋敷)にぬける道沿いの、生麦事件の犠牲者リチャードソンの墓地の右奥に並んでいた。墓地が別になったのは、「宗教習慣の違い(後述)」のためと言われるが、「中国人を蔑視していたからだ。」と考える中国人も多い。

建物が造られたのは、1892(光緒18)年。建設に5ヶ月しかかからなかったのは、部材や装飾を一括して大陸に発注し、それを輸入し組み立てたからである。彫り物などの木製品に、現在の広州市の地名と「許三友」という彫工名が刻まれているので、部材などの製作は広東で行われたと思われる。しかし瓦などには小菅集治監製造のものもあり、国産の部材も用いられているようだ。レンガの壁が崩れないように鉄製の留め金が使われており、そのヤモリが登るような形から螻蝗攀(マコウハン)と呼んでいる。こうした建築法は、関東大震災前の中華街の写真にも見られるものである。また「本尊」の地蔵菩薩像は脱活乾漆作りで、清代末期の乾漆造像の稀な遺例として重要なものである。我々が持つ「地蔵」のイメージとは異なる像だが、これは中国民間の道教信仰にもとづくもので、道教での「地蔵」は、冥府の十王を統率し人の生前ににおける善悪を検察する者とされている。そのため、自らの地位を示す「王」の字が掲げられた帽子をかぶった「裁判官」のような姿なのである。なお地蔵王廟は、横浜市内に現存する最古の近代建築物として、内部装飾なども含め「市指定有形文化財」になっている。



中華義荘の門の前で、右上の建物が地蔵王廟

2. 周辺の碑文について

中庭の入口側の「門序」北側には、「倡建地蔵廟碑」(1893年)がはめ込まれ、地蔵王廟建設の経緯が書かれている。そして「正序」の側面には「横濱震災後華僑山莊新命碑」が建てられ、震災下での状況が書かれている。関東大震災を境に、日本政府は中華義荘の地代を免除し、相続人のいない中華街内の土地を、法人の中華会館が所有とすることを認めた。こうなった背景として、中国人の間に次のような伝承がある。「大震災に、華僑の犠牲者は1600人以上にのぼった。特に災害の内何十人かは中国人・朝鮮人の虐待に巻き込まれて殺された。このため日本政府は中華会館に呼び掛けて、この事件をできるだけ国際問題にならない様に、その犠牲者を天災で亡くなった者と一緒に中華墓地に埋葬してほしい、と要請した。」(王慶仁記) というのである。この点も、今一度資料などの確認が必要であろう。

関東大震災犠牲者への慰靈碑は、墓地の奥に中国での出身地域別に建てられている。

3. 地蔵王廟修復工事など

1987年の末、地震のため地蔵王廟の西側の一部が崩落し、その修理が問題となった。この時初めて文化財調査が行われ、市から修理予算がつき、たらない部分は寄付と墓地整理で捻出することとなった。

それまで中華義荘の古い墓地には土葬のものが多く、中には故郷の地に葬ってもらうため(回葬といわれ、そのための棺船が就航した)、棺の中に石灰をつめ遺体を保存したものもあった。墓地整理の時、門を入って左側にある「安靈堂」にはそうした棺が29棺収納されていたのである。これらを火葬にふし無縁のものは合葬墓にし、跡地を販売して修理費にあて、1992年修理は完了した。戦後の冷戦関係の中で華僑社会も分裂し、中華義荘の管理もままならず、代々管理を担ってきた日本人管理人竹内さん一家に管理がまかされる状況が続いていた。しかし国際関係の変化の中、1986年に「横浜関帝廟」が不審火で焼失した事件をきっかけに、大陸系と台湾系の華僑の復興協力が実現し、地蔵王廟の修復の際にもこの関係が生かされたのである。

参考文献

中華会館編『地蔵王廟修復工事報告書』1997(王慶仁(財団法人中華会館理事)「中華義荘と地蔵王廟修復の経過について」はこの本所収)

III. 英連邦戦死者墓地の形成

1. 英連邦戦死者墓地が造られるまで



英連邦戦死者墓地の墓石と十字架(奥)

後年英連邦戦死者墓地となる土地には、戦前「保土ヶ谷児童遊園地」という施設があった。遊園地といつても観覧車などの施設があつたわけではなく、今流に言えば「植物園と運動場のある教育施設」であった。そのため、現在もバス停名は「児童遊園地前」であり、一般に「児童公園」という呼び名も使われている。開園は、1929年10月6日、以後林間学校などにも利用された。この施設は1922年に、横浜市と市学校校長会一同が企画した「学制発布50周年事業」として発案された。翌年事業として認可され、寄付金も集まっていたが、計画は関東大震災の発生で中断した。その後、1928年に市横浜公園復興復旧事業の余剰金の一部と寄付金を元手に、9月に起工式を行い、翌年10月に運動場・水泳プールなどを備えた施設として開場したのである。この事業と並行して、日清・日露戦争の戦病将兵卒忠魂のための忠魂碑建設の計画も進められ、1930年11月25日、高さ17.7メートルの碑が遊園地の一番高い所に完成した。この場所が選ばれたのは、富士山の眺望が良いことと、運動場からの見栄えも良いからだと言われている。以後、この場所では敗戦まで「招魂祭」などイベントが何度も開かれ、紀元2600年記念の行事もここで行われた。1942年12月1日には、施設名が「保土ヶ谷鍊成場」に変わり、敗戦後までこの名が使われた。これを知らないと資料の読み違えがおきるおそれがある。例えば、次に示す1945年末に市により作成された「占領軍軍政部への市の現状回答書」の以下の記述が、児童遊園

後、1928年に市横浜公園復興復旧事業の余剰金の一部と寄付金を元手に、9月に起工式を行い、翌年10月に運動場・水泳プールなどを備えた施設として開場したのである。この事業と並行して、日清・日露戦争の戦病将兵卒忠魂のための忠魂碑建設の計画も進められ、1930年11月25日、高さ17.7メートルの碑が遊園地の一番高い所に完成した。この場所が選ばれたのは、富士山の眺望が良いことと、運動場からの見栄えも良いからだと言われている。以後、この場所では敗戦まで「招魂祭」などイベントが何度も開かれ、紀元2600年記念の行事もここで行われた。1942年12月1日には、施設名が「保土ヶ谷鍊成場」に変わり、敗戦後までこの名が使われた。これを知らないと資料の読み違えがおきるおそれがある。例えば、次に示す1945年末に市により作成された「占領軍軍政部への市の現状回答書」の以下の記述が、児童遊園

地のことを示していることがわからなくなってしまうのである。「保土ヶ谷鍊成場は遠く市街地からはなれ、自然林の野趣横溢し空気清澄環境状適の地なりしも、自然林は防空施設用の薪炭材に供用され、一部を農耕に利用して時局要請に応へ、今は昔日の面影なく一般の利用もなし。」

この資料を見たからではないだろうが、1946年6月20日「保土ヶ谷鍊成場」が接收された。（接收時期については、市史通信12号の表によった。）そして、接收地には全国に分散していた英連邦戦没者（英・印・カナダ・パキスタン・ニュージーランド・オーストラリア）のための墓地が造られることとなり、その管理は英連邦戦死者墓地委員会が行うこととなった。埋葬されたのは、主に日本本国内の収容所で死亡した捕虜たちと、海南島など現地に墓地が造れず日本に送られた戦死者の遺骨である。墓石は出身地域ごとに区画分けされ、整然とならんでいる。捕虜となり旧日本領（台湾・朝鮮などを含む）の収容所で亡くなった者は、原則として火葬に付された。しかし遺骨の内、何らかの理由で個々人の骨の判別が困難になった者たちの火葬骨は、まとめて納骨堂に納められた。納骨堂に掲げてある335名の名前の中に、英連邦以外の国の人々の名があるのは、こうした理由からである。

英連邦では、1917年5月21日の英国王室憲章で、戦死者の遺体は本国に送還せず、階級差なく現地で埋葬する原則ができた。もっとも、現在世界にはこのような墓地が約2500ヶ所以上あるとされるので、英国が世界各地に植民地を持っていた時代からこうした慣習が始まっていたのであろう。保土ヶ谷の英連邦戦死者墓地の建設がいつごろから始まったのだろうか、接收直後から始まったと思われるが、くわしいことはわからない。1947年8月7日には、カナダ兵の墓地区画で、アイケル＝バーガー第八軍司令官も参列して慰靈祭が行われているので、この頃には墓地としての体裁は整っていたのであろう。1948年5月7日付けの「保土ヶ谷英連邦戦死者墓地についての報告書」（キャンベラ公文書館蔵のA.E.Brownの報告書集所収。坂口春海氏より提供。）を見てもそれがわかる。また、1948年頃から1952年頃まで日本に滞在し、英連邦戦死者墓地の建設にもかかわったJack Leemon氏の著作の中には、墓地がほぼ完成したことを伝える記事・写真を載せた1949年6月18日付けの新聞（BCON紙？）記事が紹介されている。忠魂碑の撤去がいつだったかはわからない。1948年5月の報告書には、忠魂碑があることが記載されているので、同年8月の慰靈祭の頃までに撤去されたのであろう。現在忠魂碑は、戦後区の奥の地表面に丸い基礎部を残すのみである。忠魂碑に納めされていた「日清戦争以来の横浜出身の戦病死者の名簿・位牌」などは鶴見の総持寺に移され、その後三ツ沢の戦没者慰靈施設に納められているという。

2. 接收地の解除と英連邦戦死者墓地存続を巡って

1952年4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効した。それにともない接收地は法的には返還されることになった。旧児童遊園地（現英連邦戦死者墓地）の返還についても、1952年に横浜市的小・中学校校長会が、講和条約締結を見据えて返還を決議し、各方面に陳情活動を始めていた。しかし、講和条約と同時に結ばれた旧日米安保条約の三条、および日米行政協定により、米軍が「必要」とする地域・設備については、国と当事者が新たな「貸借関係」を結んで「占拠」が続けられた。旧児童遊園地（現英連邦戦死者墓地）も同様の扱いとなった。だが、前段で指摘したように英連邦戦死者墓地の建設は、ほぼ終わっていたのである。こうした墓地を海外に造るのが英連邦の政策になっている以上、墓地建設開始の際、日本政府がそのための土地の提供と墓地の建設に合意していたのか、そもそも、英連邦の墓地建設に意見が言える立場にはなかったのか、これらの点については確認できなかった。なお、市史通信12号によれば、旧児童遊園地の接收解除は1952年7月1日である。

次に、英連邦戦死者墓地の取り扱いがはっきり示される資料は、「日本国における英連邦戦死者墓地に関する協定」（1955年9月21日署名。1956年6月22日公布。「外務省条約検索」で閲覧ができる。）である。この協定では、1941年から1945年の間に戦死した英連邦戦死者を日本領内に埋葬する場所として狩場町の墓地をあてること、日本側はこの土地を30年間貸与し、期限がきても用途に変更がなければ貸与は自動延長されること、が決められていた。また墓地の管理は、英連邦側と日本人からなる合同委員会が行うことが決められていた。少なくとも、「墓地がある」という前提を認める協定である。だが、この協定の内容が、講和条約後に結ばれた「貸借関係」と同じかどうかは確認できていない。横浜市は、協定が発効するまでの猶予期間中の1956年3月16日、墓地の用地は本来横浜市のものゆえ、国が3067万円・英政府が1000万円拠出して買い上げてほしい旨の提案をおこなっている。墓

地の撤去が難しいと判断し、次善の策を提案したのであろう。そして同年の5月8日、国と英政府が土地買い上げに同意、実際の譲与は10月20日に成立した。

同じころ、横浜市地域の米軍高射砲陣地が接收解除になるかわりに自衛隊が入る、という話が持ち上がっており、県会・市会で大問題となっていた。1955年8月1日県は、保土ヶ谷区花見台の土地からサッカー場分の土地を除いた土地の貸借契約を、県議会の了承のもと国と締結した。一方、市に対しては、磯子区岡村の市有地を自衛隊高射砲陣地として借り受けたいという要望が伝えられていた。反対派は市民や労組を中心に運動を組織し、議場周辺には千人ほどの組合員などが集結し議事は紛糾、12月6日までの会期がさらに延長される事態となった。だが12月15日、接收解除と陣地貸与問題に関する議案は可決された。

複雑な経過の結果をまとめてみよう。結局国は、英国・横浜市・神奈川県の三者の間で妥協できる点を探っていたのである。旧児童遊園地（現英連邦戦死者墓地）の土地は、国とイギリスとにより買い上げられ、事実上永久貸与となった。横浜市は売却収入などを用い、周辺の私有地を購入し児童遊園地を現在の規模にした。自衛隊の高射砲陣地は花見台（現保土ヶ谷公園）と岡村（現岡村公園）に造られ、花見台には県立のサッカー場も建設された。

なお、岡村の高射砲陣地は1966年まであった。以上、今の時点で確実と思われる事実をまとめてみた。

参考文献

笛本妙子『連合軍捕虜の墓碑銘』草の根出版会、2004

保土ヶ谷区史編集部会編『保土ヶ谷区史』保土ヶ谷区、1997

Jack Leemon "War Graves Digger" Australian Military History Publications、2010

横浜の空襲を記録する会編『横浜の空襲と戦災』第5巻 接收・復興編、横浜市、1977

半澤正時監修『写真集 保土ヶ谷いまむかし』郷土出版社、1994

坂井久能「神奈川県における忠靈塔建設」神奈川県高等学校教科研究会社会科部会編

『神奈川の戦争と民衆』1997 所収

江浦 洋「死者の認識票と英連邦戦死者墓地」小田康徳ほか編『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房、2006 所収

「横浜市史稿」『教育編』1932 pp.593-594

IV. 「銘々票」を用いた英連邦戦死者墓地納骨堂のオランダ人記名者の調査

英連邦戦死者墓地に埋葬されている者たちについては、笛本さんなどPOW研究会によるGHQ資料による調査が行われ、HP上で公開されている。個々の埋葬者にはそれぞれの人生があり、それをたどりその遺族・子孫と交流し続けるのは大切なことである。このことを巡っては、さまざまな話があり個々に紹介することはできない。ここでは、納骨堂に記名されたオランダ人について、新資料も加えて述べることにしたい。新資料とは、「銘々票」とよばれる日本軍が捕虜（当時の言い方では俘虜）個々人ごとに作成したカードのことで、昨年夏よりオランダ人に関するものが利用可能となったのである。戦後、日本政府は「銘々票」のあることを進んで明らかにはせず、各国への提供過程も相手ごとに異なっていたので、まとめて利用できずにいた。しかし、オランダにオランダ人関係の「銘々票」があり、POW研究会も日本文の英訳作業に協力し、昨年夏からHPで公開され、利用が可能となった。なお英連邦の国々やアメリカ合衆国の捕虜の「銘々票」はまだ利用できない。

納骨堂には335人の記名があるが、その内284名（英国人215名・アメリカ人48名・オランダ人21名）の死亡経緯や死亡日などがわかっている（POW研究会のHP参照）。そして、大部分の者が門司にあった福岡第四収容所で死亡している。ほとんどの者が、南方の収容所から日本に輸送される際の劣悪な環境（「地獄船」という）で発病し、北九州に上陸直後に亡くなった者たちである。福岡第四収容所での死亡者について調査した「GHQ314文書」

（1946年4月から48年9月の期間に関する調査の報告書で、文は、福岡地区の「The 108 Graves Registration Platoon」の責任者Joseph McGuire中尉の通信文や、1946年4月に行なわれたRobert Mc（？以下読めず）中尉による調査報告書などが利用されている。）には、「門司収容所（正確には福岡第四収容所）で死亡した303名の捕虜の遺骨が、門司市内の

大雄寺の共同墓地から発掘されたこと」が報告されている。また同文書は、遺骨を回収した303名の内、福岡第四収容所で死亡した者が192名(英129名・米49名・蘭14名)、捕虜輸送船関連で死亡した者111名(蘭8名)としている。この収容所での死者数は突出して多いのは、この収容所が重篤な者を集めていたからかもしれない。なおこの収容所の建物は、YMCAの建物として1916年に竣工したもので、1922年のクリスマスには、来日していたアインシュタインがバイオリンを弾いたことでも知られている歴史的な建物である。戦後も信愛幼稚園となって利用されていたが、1999年に取り壊されてしまった。幼稚園名で検索すると建物やその内部の写真を見ることができる。

オランダ人21名をP研のHP上の順で示すと以下のようになる。

No.1 Adel, No.2 Berg, No.3 Bloor, No.4 DAM Ten, G.I. No.5 Deffor,
 No.6 Dussen, No.7 Eichenberger, No.8 Fischer, No.9 Helden, No.10 Hilling,
 No.11 Hout, No.12 Jolly, No.13 Kock, No.14 Kselik, No.15 Lohn,
 No.16 Nell, No.17 Niesten, No.18 Persijn, No.19 Schipper, No.20 Wijk,
 No.21 Winkel,

次に、収容所で死亡した14名のオランダ人を銘々票で検索してみると、次の者たちとわかった。

No.1 Adel, No.2 Berg, No.5 Deffor, No.8 Fischer, No.9 Helden,
 No.10 Hilling, No.12 Jolly, No.13 Kock, No.14 Kselik, No.16 Nell,
 No.17 Niesten, No.18 Persijn, No.19 Schipper, No.20 Wijk,

この内No.5 Defforは、「銘々票」上の綴りはDefoerであるが、認識番号が一致したので同一人物と判断した。これらの人々は、太平洋戦争開戦直後に蘭領東インドで捕虜となり、後に日本に送られた人々である。渡日がもっとも早い人はBergで、42年10月に長崎県香焼島に来ている。

次に、捕虜輸送船関連の死亡者を検索してみよう。「大雄寺」で検索したところ、戦後遺骨が「昭和20年7月18日(7月は9月の誤り)、GHQのGraves RegistrationのFletcher軍曹に引き渡された。」との共通の記載があった。検索の結果わかった収容所以外で死亡した者たちを、死亡と関係した輸送船名によって分類してみよう。

- ① 昭南丸(門司着 42年11月25日 検索結果 1人)
 Riel 1942年11月28日死去
- ② 東福丸(門司着 42年11月25日 検索結果 11名 10名水葬)
 No.7 Eichenberger 1942年12月31日死去
- ③ はわい丸(門司着 43年4月24日 検索結果 5名 2名水葬)
 No.11 Hout 1943年4月23日死去
 No.15 Lohn 1943年4月24日死去
 No.20 Wijk 1943年4月23日死去
- ④ 旭光丸(門司着 43年5月20日 検索結果 2名)
 No.3 Bloor 1943年5月30日死去
 No.6 Dussen 1943年5月30日死去

では順に、これらの名を、GHQ314文書や納骨堂記名他の資料と対照してみよう。

・Rielについて。

GHQ314文書に記載がなく、納骨堂にも記名されていない人物である。しかし銘々票を見ると、昭南丸で門司到着後の1942年11月28日に死亡している。しかし、オランダ側の資料では、東福丸船上で亡くなり水葬された、記されている。

・No.7 Eichenbergerについて。

死亡に関係する東福丸は、銘々票の記載によれば、函館に向かう途中だったようだ。GHQ314文書では、氏名の文字が滲んで読みにくく、綴りも二つに分れているが、タイプした人が長い綴りのために途中で字間を空けてしまった、と考え同一人物と判断した。

・No.6 Dussenについて。

銘々票でもGHQ314文書でも綴りはTissenだが、どちらが正しいのだろうか。No.3 Bloorとともに銘々票には、「門司市庄司東谷町大雄寺墓地に合同合葬せる所属不明遺骨 111名中旭光丸における死亡者」という記載があり、GHQ314文書も二人を旭光丸の死亡者としているので、DussenとTissenは同一人物と判断できる。また、この人物の子息が2003年11月に来日しており、Dussenと名乗っていたので、Dussenが正しい。

次に、名前の出てこなかった者について、検討してみよう。

・Ifia Labal(?)について。

GHQ314文書の東福丸関係のところに、No.7 Eichenberger以外にもう一人の記載がある。Ifia Labal(?)とでも読める人だが、銘々票に該当者はなく、納骨堂にも記名されていない。この人物についてはまったくわからない。

・No.4 DAM Ten, G.I.について。

GHQ314文書のはわい丸関係の所に、「Ten Dan Balelt Jan」として記載されている。納骨堂には記名があるが、銘々票はみつからない。オランダ側の資料では、Grerrit Jan ten Dam(1902生)という名があるのでこの人だと思われるが、なぜ銘々票にないのかはわからない。(オランダ側の戦死者関連資料には、「英靈墓地管理委員会」と「軍人会」のHPがある、というフローニンゲン大学の中沢陵子氏からのご助言があった。)

以上、まとめてみると、オランダ関係の死亡者数は、GHQ314文書で22名(No.4 DAM Ten, G.I.とIfia Labalが加わりRielがない。)。納骨堂記名で21名(No.4 DAM Ten, G.I.が加わりRielとIfia Labalがない。)。銘々票で21名(Rielが加わりNo.4 DAM Ten, G.I.とIfia Labalがない。)となる。

捕虜となり旧日本本土の収容所で亡くなった者は、原則として火葬に付されたが、遺骨の内、個々人の骨の判別が困難になった者たちの火葬骨は、まとめて納骨堂に納められた、と書いた。では、火葬骨の個体判別が不能となったのはなぜなのだろう。死体の数が多いために、一度に何体かを一緒に火葬したのではないか、という説明もある。しかし、それでは火葬しにくく、野天での火葬も非現実的なので、こういう事はなかったのではないか。むしろ、次のように考える方が自然ではなかろうか。

No.3 BloorとNo.6 Dussenの銘々票の裏には、「門司市庄司東谷町大雄寺墓地に合同合葬せる所属不明遺骨 111名中旭光丸における死亡者」という記載がある。111名という数は、GHQ314文書が示す捕虜輸送船関係死亡者数と一致しており、日本側が捕虜輸送船関連の死亡者にかぎり、火葬のうえ合葬していたことを示すのではないだろうか。一方、敗戦直後GHQは303名の遺骨を大雄寺共同墓地で発掘し、その遺骨は納骨堂に合葬・記名されている。なぜこうなったのであろうか。

まず、実際は日本側が全部の火葬骨を大雄寺に合葬しており、敗戦後捕虜輸送船関連の死者のみを合葬していた、と銘々票記入した可能性がある。次に、多数の骨壺の保管には場所が必要で、とても大雄寺だけではおきまりきれなかった。地図を見ると、周辺には寺が多いのでそれらに分散して保管していた。門司の町は45年6月29日午前一時過ぎからB29の空襲を受けている。ちなみに、門司での輸送船関連の死者は、1945年1月末から4月中旬までに死者が44名にのぼったブラジル丸(伯刺西爾丸)の死者(すべてアメリカ人)が最後である。この6月29日未明の空襲により骨を保管していた寺などが焼失したので、合葬墓があり空襲でも焼けずにすんだ大雄寺にその灰を集めたとも推測できる。いずれにせよ、詳細は現地調査などが必要になるであろう。(文中にあげたHP名を知りたい方は手塚まで。)

報 告 第7回日吉をガイドする講座『大倉山と海軍気象部』盛況

様々な角度から日吉やその周辺を学ぶために始めた「日吉をガイドする講座」は、2月25日に来往舎大会議室で第7回目を開催した。内容は、昨夏の日吉での戦跡シンポジウムでも報告された大倉精神文化研究所研究員の林宏美氏を講師に『大倉山と海軍気象部』というタイトルで行われた。戦跡シンポジウムでは主催者で聞けなかった会員を始め、多くの参加者を得て盛況だった。

現段階で明らかになった事実と課題を丁寧に紹介され、また大倉精神文化研究所から発見された海軍気象部が使っていた機器類なども持参されての説明は、大変好評だった。

林氏から、当日のレジュメと、参考資料として配布された、昨夏のシンポジウムの報告レジュメの提供を受けたので、次項で掲載する。

資 料

第7回 日吉をガイドする講座 (於: 来往舎大会議室)

大倉山と海軍気象部

財団法人 大倉精神文化研究所 林 宏美

はじめに

東急東横線大倉山駅から線路沿い渋谷方面に坂道を進んでいき、その先にある階段を登ると正面に横浜市大倉山記念館があります。この建物は、昭和7年(1932)に、実業家の大倉邦彦により、大倉精神文化研究所本館として建設されたものです。現在、横浜市の市民利用施設として、さまざまな文化活動の拠点となっているこの建物は、太平洋戦争末期の昭和19年(1944)から終戦を迎えた昭和20年(1945)8月末までの約1年の間、海軍気象部が借用し、活動を行っていました。

大倉精神文化研究所には、海軍気象部の借用に関わる資料の一部が残っています。今回はまず海軍気象部について少し説明をした後で、沿革史資料や、戦時中に大倉山の海軍気象部にいた方への聞き取りによって知ることが出来た海軍気象部による大倉精神文化研究所本館建物の借用とその業務について話をします。また、終戦後の話や日吉を含めた海軍他施設との関わりについても触れていただきたいと思います。

そして、本題とはちょっと離れますぐ、今回の講座の会場でもある慶應義塾大学に関わる部分で、大倉精神文化研究所・大倉邦彦と慶應とのつながり等についても少し話をしたい思います。

1、大倉山と大倉精神文化研究所・横浜市大倉山記念館

- ・大倉精神文化研究所の創立
- ・研究所から大倉山記念館へ
- ・横浜市有形文化財への指定
- ・大倉邦彦・大倉精神文化研究所と慶應義塾大学

2、大倉山の海軍気象部

- ・戦時の気象関連業務
- ・海軍気象部について
- ・大倉精神文化研究所の沿革史資料から見る海軍気象部
- ・大倉山の気象部員の方への聞き取り調査
- ・海軍気象部移転中の研究所の業務
- ・戦後の動き～建物の接收と家具の接收～
- ・軍関係の他施設とのつながり

日吉の連合艦隊司令部や他の海軍関連施設とのつながりは？

風船爆弾と関係は？

資料

第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム第2分科会レポート発表
(平成23年8月7日)海軍気象部分室の大倉山移転とその活動について
～大倉精神文化研究所所蔵資料の調査と聞き取りから～
財団法人大倉精神文化研究所 林 宏美

はじめに

昭和7年に建てられた大倉精神文化研究所本館（現、横浜市大倉山記念館）には、昭和19年から昭和20年の終戦時まで、海軍気象部の第5分室が移転し、執務を行っていた。しかし、その事実は一般にはほとんど知られていない。

今回の報告は、大倉精神文化研究所で所蔵する海軍気象部関連資料の調査および当時の気象部員の方々への聞き取り等によって、現在までに把握している海軍気象部の研究所建物借用と大倉山における気象部分室の活動について紹介するものである。

1、大倉精神文化研究所について

大倉精神文化研究所

昭和7年に、実業家の大倉邦彦によって設立。

研究所設立の趣旨は、東西両洋の文化を研究してその良い所を学びながら、日本の伝統文化を守り大事にし、双方の成果を教育に活かして社会に役に立つ人間を育て、世界文化の発展に貢献すること。

研究所の主な活動

- ・宗教、教育、哲学、歴史など、精神文化に関する研究活動
- ・図書館経営

研究所の建物について

- ・研究所本館（写真1）
- ・研究所附属施設…所員住宅、来所者用宿舎、武道場など

現在残っているのは本館建物のみ

研究所は財政難のため、昭和56年（1981）に横浜市へ研究所の土地を売却。

その際、建物は市へ寄贈する。

→本館建物は市による改修を経て、昭和59年に横浜市大倉山記念館として開館、敷地は大倉山公園として整備される。

現在では市民利用施設として、横浜市港北区の象徴的存在となっている。

横浜市指定有形文化財…平成3年には建物、平成16年には建築関連資料が文化財登録

2、海軍気象部に関する調査とその成果

・海軍気象部が大倉精神文化研究所の建物を借用した理由

→文献等にその記述を発見することは出来ない。

しかし、研究所周辺では海軍関係機関が数多く移転している。

例：慶應義塾大学日吉キャンパス…海軍軍令部・連合艦隊司令部など

港北区師岡町…海軍省図書庫

→海軍気象部の大倉山移転もこの一連の枠組みの中で、決められたものと推察。

・海軍気象部の施設について

海軍気象部本部は、神田区駿河台の女子基督教会館内

他には、昭和19年末の段階で第1から第7までの分室と錦町倉庫

・大倉山は第5分室で、東京郊外唯一の分室であった（他の分室は本部周辺）。

・海軍気象部は大倉山を最後の拠点にするつもりであった。¹

しかし、『気象百年史』にも大倉山の海軍気象部について、それ以上の記述はない。

¹注①『気象百年史』214頁

→大倉精神文化研究所では、2つの方法によって調査を行った。

(1) 所蔵資料の調査

(2) 元海軍気象部員への聞き取り

(1) 研究所で所蔵する海軍気象部関連資料の調査

・海軍気象部に関する資料はおおよそ4種類に分類

- 1、賃貸契約書や、それに伴う照会・回答の文書
- 2、終戦による契約解除と搬入機材の撤収等に関する文書
- 3、気象部の業務に関する資料
- 4、研究所の業務上作成された文書（例：日誌・事業報告など）

上記に挙げたのは主に文書類だが、他に以下のような資料も研究所から見つかっている。

- ・飛行機から雲を撮影した映像フィルム3巻
- ・水路部の焼印が押された本立て3点（写真2）
- ・浮力測定器筐

・海軍気象部関連資料の整理と公開

番号を付したうえでデータベース登録し、「研究所沿革史資料」の一部として整理。

データベース自体は内部利用に限定されるが、資料は全て公開しており、研究所附属図書館の受付で請求すれば閲覧可能。

文書類については、平成22年3月刊行の『大倉山論集』第56輯に翻刻と解題を掲載している。²

・所蔵資料調査の成果

資料の調査によってわかったことは、主に以下の3つの事柄

- ①研究所本館建物と研究所附属施設の借用契約に関すること
- ②終戦による撤収、借用契約解除後の動き
- ③気象部の業務に関すること

①研究所本館建物と研究所附属施設の借用契約

研究所本館建物借用に関する初出資料

→昭和19年4月10日付「研究所借用に関する照会」

内容…予想される敵の空襲に備えて万一の場合には研究所を借用し、作業を継続したいので、借用の便宜について配慮して欲しい。

→照会に対して研究所では4月14日付で承諾の回答

研究所の日誌に見る契約締結までの動き

4月18日…海軍気象部部員が研究所来所、所長と主事が応接

5月19日…気象部が機械類搬入

5月20日～24日…機械取付作業

6月6日…海軍気象部から7名の係員が来所、執務開始

8月31日…海軍気象部百余名が下検分に来所

9月1日…海軍気象部が移転

→海軍気象部と研究所との正式な賃貸契約の締結は、昭和19年8月20日。³

研究所付属施設の借用契約

武道場兼弓道場であった神風館と、湯殿については、本館と一緒に賃貸契約締結

昭和20年3月には研究所附属寮の富嶽荘の賃貸契約締結

4月1日には世田谷区奥沢にあった明世寮の賃貸契約締結

なお、明世寮については、気象部の女子寮として使用される。⁴

2平井誠二・酒井君代「海軍気象部による大倉精神文化研究所建物の借用」（『大倉山論集』第56輯、大倉精神文化研究所、平成22年3月25日）

3ただし、昭和19年8月20日付の借家契約書は案で、実際の契約締結はさらに後であった可能性もある。

4沿革史資料No.5366-9「物品保管ノ件依頼」、沿革史資料No.5366-12「女子寮残品受領証」などを見ると、「女子寮（明世寮）」という記述が見られる。

②終戦による撤収

- ・終戦により、昭和20年8月31日付で、研究所と海軍気象部との賃貸契約解除
- ・研究所内に残された機械や備品類の撤収が行われていく（撤収完了は昭和22年5月）。多くの物品は、運輸省水路部と中央気象台に引き取られるが、一部の備品は研究所に払い下げ。
- ・進駐軍が、海軍関係の調査のために、何度も研究所へ来訪。
- ・本館建物の接収の話も存在。

日誌の記述

昭和20年11月1日…米国兵3名来所、建物借用の意向を伝え、翌日の来所を約束
2日…米軍将校3名建物借用の件で来所、施設見学と図面借用

4日…借用の件で米軍将校10余名が来所

5日…米軍建物借用の件で県庁連絡事務局へ出張

8日…県庁連絡事務局から建物借用通知

9日…進駐軍から借用中止通告

→借用が中止になった理由については不明

ただし、進駐軍は家具を搬出しており、研究所は県からは接収家具代を受け取っている。

③気象観測業務

- ・研究所では、未使用の気象観測用紙、数種類が現存
- ・平成21年に、研究所附属図書館の書庫内から「浮力測定器筐」発見
昭和18年2月、久保田無線電機株式会社製（写真3）
中にはポンベ型の装置、質量の異なるおもり数種類（写真4）
→気象観測に用いる気球を飛ばす際に用いられたものと推測

(2) 聞き取り調査について

大倉山の気象部で勤務していた、根本順吉氏、沼田昭氏、町田郁子氏、伊佐幸吉氏の4名に聞き取り調査を実施

→大倉山での海軍気象部の業務内容や勤務の様子等、文書に残されていなかった事項を確認

①大倉山での海軍気象部の業務

根本氏…千島・北海道の海霧発生の予報を行うためのデータ収集・分析

沼田氏・町田氏・伊佐氏…アメリカ・ソ連が発信した、気象電文の暗号解読

ただし、戦局の見通しがついてくると、気象電文は平文で打たれるようになり、暗号解読の仕事はほとんどなくなったとの事（沼田氏）

なお、研究所には、暗号学概説の講義に関するメモが残っており、暗号解読方法の指導や教育についても、大倉山で行われていたと考えられる。（写真5）。

②勤務の様子・雰囲気

- ・研究所本館は今と同様に白い建物だったが、戦時中は塔が黒く塗られていた。
移転は、戦局が厳しくなってからのことだが、大倉山の気象部の雰囲気は割と穏やかであった。町田氏…大倉山での勤務を「楽しい青春の想い出」とも述べている。
- ・終戦時には研究所本館建物前の庭で気象部の書類焼却を行う。
- ・自分が行っていた業務以外については全く知らされず、異なる部署や研究所員らと接触する機会もほとんどなかった。
=気象観測業務については誰からも話が出ていないが、大倉山の気象部の業務ではなかったと否定は出来ない。

聞き取り調査の成果は、『大倉山論集』第51輯、第52輯に掲載⁵

おわりに

軍による民間施設借用の実態解明

戦争遂行に関する軍事機密として関連文書の多くが処分されており制約が大きい。

→その意味では研究所に賃貸契約書等の資料が現存し、軍とのやりとりについて把握し得たのは稀少なケースといえるか。

今後の調査・研究について

- ・海軍の契約に関する基本条項の確認
- ・陸軍気象部の調査
- ・他の民間施設借用に関する調査成果や情報の収集

【資料写真】



(写真1)



(写真2)



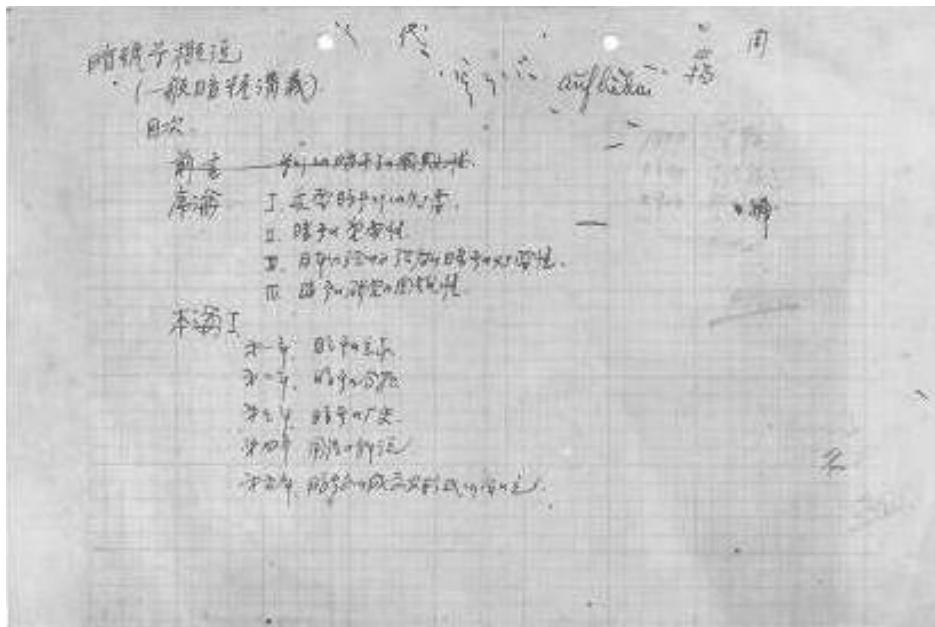
(写真3)



(写真4)

5根本順吉「大倉山の想い出—旧海軍気象部分室について—」（『大倉山論集』第51輯、大倉精神文化研究所、平成17年3月31

日）、沼田昭・町田郁子「大倉山の想い出—旧海軍気象部分室について（2）—」（『大倉山論集』第52輯、大倉精神文化研究所、平成18年3月31日）



(写真5)

投稿

日吉の思い出（空襲・家族・優しかった兄等々）

小口幸子

編集部より：見学会に参加された小口さんに、戦時下を日吉本町で過ごした体験を書いていただきました。

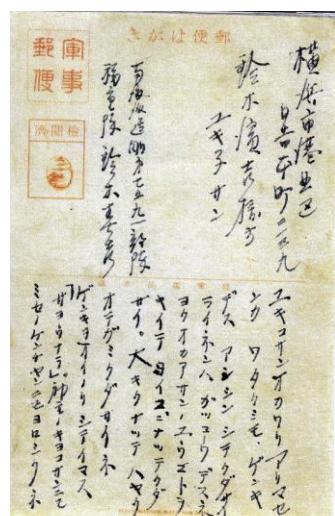
私は日吉本町の旧家十代目の両親から6人兄弟の一番末に生まれました。すぐ上の兄と姉二人は子どもの頃に亡くなっています。兄弟の味は知りません。20才上の兄は太平洋戦争の兵隊で満州に行き、その時は幸せな毎日のようにでした。私に手紙もくれました。その後ニューギニアの島に行ってから、戦死しています。

17才上の兄は南の国へ兵隊に行き、マラリアの病気になって帰ってきました。復員2年後には元気になりました。

昭和20年4月1日に私は日吉台小学校に入学しました。4月15日の空襲で校舎は全焼してしまいました。3年から上の児童は高田町の興禪寺に疎開しました。私は近くの金蔵寺で勉強しました。空襲警報のサイレンが鳴ると急いで家に帰りました。この空襲の時に我が家は無事でしたが、前のお宅の渡辺さんと隣の小嶋さんと若林さんのお宅が全焼してしまいました。焼夷弾が落ちる時に花火みたいと見ていた若者が二人いました。一人の小嶋りゅう吉さんは太ももに破片が刺さり、切断することになりました。若林伊三夫さんは胸に刺さり即死してしまいました。その死体が我が家の中庭に運ばれてきました。警備兵がそのお兄さんを足でけっておこっていました。それを見た私はとっても悲しく辛かったです。

我が家は裏山に防空壕を掘り、空襲のときには避難しました。農家でしたので、荷牛も飼っていましたが、その牛の入るところも掘ってもらいました。終戦後その牛が盗まれてしまいました。食糧不足の時代でしたので、その牛を殺して、肉を持って行ったようでした。今日吉台中学校のあるところに牛の死体がありました。これには父も私もとても悲しい思いがしました。

私たちが3年生の二学期ごろにやっと日吉台小学校の校舎が出来上がりました。でも校舎が足りなくて午前と午後の二部授業でした。今日吉本町小嶋園さんの男の子が不発弾を拾って来て庭の防火用水に投げ、それが爆発し、眼の玉が飛び出し大けがをして亡くなりました。このことも悲しい思い出です。



春吉さんからの軍事郵便

戦死した兄、春吉さんもとっても優しい兄だった様で、私が生まれた時は母に「これからこの子を育てるのは大変だなあ、幸せになるように俺が名前をつけてやる」と言って、私の名前が幸子になりました。私はきっと天国から見守ってくれていると信じています。

ニューギニアで戦死した兄も婚約者がいたのに結婚もできず本当に残念に思います。その婚約者の加藤絹子お姉さんも元気に今は長野県にいるようです。93歳くらいだと思います。きっと春吉兄が天国から見守ってくれていると思います。

そのころのいろいろな思い出がありますが、今でも同級生と仲良くお付き合いしています。昔話が始まると話が終わりません。とても楽しい時を過ごしております。

投稿

戦争遺跡か、軍事遺跡か 一私の危惧一

山田 譲

文化庁の『近代遺跡調査報告書(9)政治・軍事』の発行が昨年も延期されたことは、戦争遺跡保存全国シンポジウムでの十菱代表の基調報告でご存じの方も多いとおもいます。残念におもいます。日吉台地下壕が「公的」な認定を受けることは、私たちの運動にとってもプラスです。

しかし、ひとつ気になることがあります。報告書の表題が「政治・軍事」とされているように、報告書の中でも「軍事遺跡」という名称が使われているということです。これでいくと日吉台の地下壕や建物も軍事遺跡ということになる。戦争遺跡という表現をさけようとしているようにみえます。戦争遺跡とよぶか軍事遺跡とよぶか。これは決して見過ごしてはならないことではないかとおもいます。

私たちは否定的なものとして「戦争遺跡」とよんでいます。しかしこれを「軍事遺跡」と言いかえると否定的な意味合いが消えてしまいます。私たちの会の顧問の白井厚先生は以前の講演で、私たちのめざす平和ミュージアムと、欧米によくある戦勝記念のための軍事博物館との決定的違いについて話されていたことを思い出します。日本にも「記念艦三笠」や「大和ミュージアム」のように、日本の対外戦争を肯定・美化する観光施設があります。横須賀の猿島要塞跡の地下トンネルは、なんと「愛のトンネル」と名付けられ血なまぐさい戦争の臭いを打ち消そうとしているかのようです。

それと同じで「軍事遺跡」というとらえ方は、平和教育のための実物資料としての活用をさけようとするものだろうとおもいます。日本の自衛隊は今や世界でも有数の軍事力をほこっています。文化庁としては防衛省の顔色も見ているのかもしれません。危惧と疑問を感じるのは、私だけでしょうか。

お知らせ

2012平和のための戦争展 in よこはま

特別企画

5月27日(日) 13時30分～16時

・挨拶と講演 小山内美江子実行委員長(脚本家)

・講演「原発難民となって」秋山豊寛さん
(宇宙飛行士・ジャーナリスト・京都造形芸術大学教授)

・報告「大学生がえがく脱原発の未来マニュアル」

フェリス女学院大学エコキャンパス研究会

6月3日(日) 13時30分～16時

・講演「新たに公開された無差別爆撃の写真」山辺昌彦さん

(東京大空襲・戦災資料センター主任研究員)

「『硫黄島からの手紙』を次世代に伝える」富岡直子さん(横浜市港北区在住)

・中学生の朗読劇「横浜大空襲」

展示: 5月31日(木)～6月2日(土) 10時～19時

内容: 横浜大空襲・原発問題・沖縄・米軍基地・戦争遺跡など約500点

会場: かながわ県民センター(横浜駅西口)

◎ 保存の会は今年も展示参加します。

活動の記録 2012年1月～4月

- 1/9 ガイド学習会 (菊名フラット)
 1/19 地下壕案内 神奈川県教育委員会・横浜市文化財課 2名
 1/20 地下壕見学会 日吉南小学校 6年生・先生 119名
 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 1/23 地下壕見学会 シニア・エージ (慶應大学OB他) 33名
 1/28 定例見学会 57名 しんぶん「赤旗」取材
 2/1 地下壕見学会 川崎市民アカデミー 39名
 2/4 定例見学会 31名
 2/6 地下壕見学会 村田栄寿会 (村田製作所OB) 20名
 2/17 ガイド養成講座打ち合わせ (日吉地区センター)
 2/18 ガイド学習会 (菊名フラット)
 2/24 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 2/25 第7回日吉をガイドする講座「大倉山と海軍気象部」講師 林宏美氏
 (慶應義塾日吉キャンパス 来往舎大会議室)
 3/1 地下壕見学会 田園調布学園高校生・先生・保護者 42名
 3/7 地下壕見学会 下田町自治会文化部 40名
 3/15 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会 (法政第二高校教育研究所)
 3/17 第1回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 (来往舎大会議室)
 3/23 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 3/24 ひよ鯛まつり展示参加 (日吉鯛が崎公園ブレイブワーク)
 3/28 地下壕見学会 高田地区民生委員・児童委員協議会 23名
 3/31 定例見学会 50名
 4/4 地下壕見学会 横浜建設一般労組主婦の会・神奈川の自然と環境を守る会 46名
 4/8 ガイド学習会 (菊名フラット)
 4/11 地下壕見学会 慶應大学体育自動車部S・36卒業生 13名
 日吉キャンパス職員研修で地下壕を説明 19名
 4/14 第2回日吉の戦争遺跡ガイド養成講座 (来往舎大会議室・フィールドワーク)
 運営委員会 (日吉地区センター)
 ○ しんぶん「赤旗」に紹介記事『巨大な地下司令部』(2月17日首都圏版)
 ○ かながわボランタリーアクション推進基金21『未来を拓く挑戦者たち』vol.5に紹介記事

予定

- 4/27 会報105号発送 (日吉地区センター)

☆定例見学会 毎月第4土曜日 13時より 4/28・5/26・6/23・7/28

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで **TEL 045-562-0443** (喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里:横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会